

---

月 刊

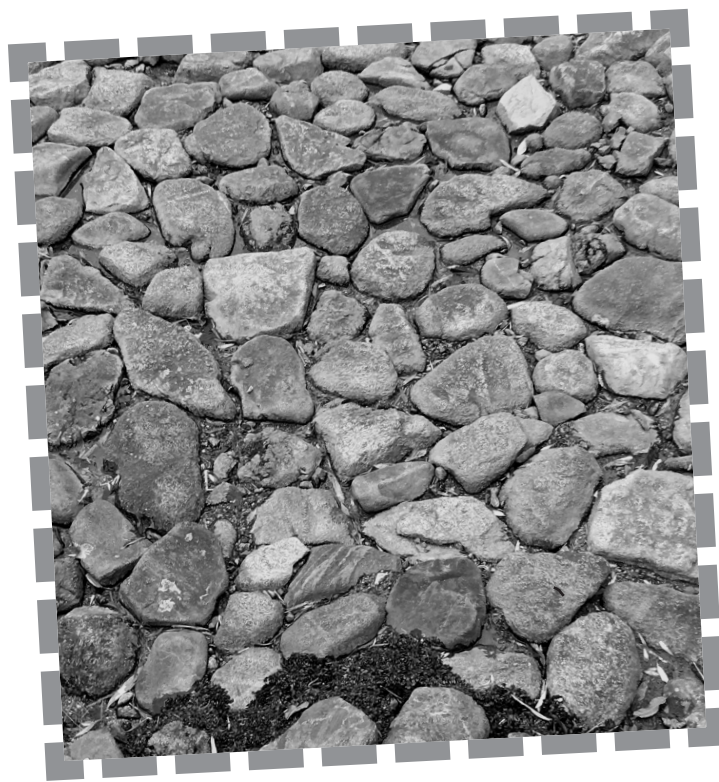
---

# MéLange

---

Vol.112

---



---

2016.04.24

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.112 2016.04.24

「月刊めらんじゅ」編集部

# 富哲世

## ひと言詩評 15

### 岩脇リーベル豊美さんの詩

岩脇さんはドイツの大学に教鞭をとり暮らしている。ふだんよりも真っ直ぐなこの詩を読んで、その悲しみの大きさのようなものを感じて味わう。  
 たとえば、家の扉に鍵を差そうとしてその瞬間、ふと人の苦難や悲しみが洪水のように身に押し寄せて来る、というような。  
 この時現実を引き裂く、水を歩くイエス、の悲しみのような、沈黙の悲しみが、ひしひしと悲憤のように身に沁みているのではないだろうか。

### 波

千の難民が溺れ死んだ内海の水深はその憧憬との等価を示している  
 長い岸を延長するとG線上ではいまもむかしも砲声が響いていた

踵のしたはただ海水  
 わたしは一枚の紙切れを隔て  
 海水のうえに立ちすくんでいる  
 船が母港を忘れて沈められると

漕ぎ出す岬  
 舞いもどる手続きをする島々  
 色彩世界の痛みを湛えて  
 運河は河口から逆流する  
 地中海には魚がいない  
 太平洋とは比較できない

(ブログ「詩人通りより」から)

わたしの財布は鍵穴に合わないまま  
 閉じ籠められ溺れる人を救えない  
 わたしの鈴は俯いたきり歌わない  
 聖められているのに  
 穢土のひとに盗まれて  
 貧しい国をより貧しくしている

われわれヨーロッパ人は  
 誰もがいち度は難民だったと  
 ユグノーを先祖にもつ  
 婚姻によって生じた親族関係の女性が言った  
 わたしはヨーロッパ人ではない  
 という事実を前提に

## 詩 & 俳句

I miss 環句 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 04  
 春水 三十句(俳句)……………高橋雅城 05  
 漂流/交差 ……………中嶋康雄 06  
 観音…………… 富哲世 08  
 「扉」の絵を描く試み……………有時 秀記 09  
 夏の日に……………黒田ナオ 10  
 だらけ ……………大橋愛由等 11  
 ティー ……………月村 香 12  
 奴婢論 (額に手をおく) II ……………高谷和幸 13  
 都市草紙6 黄色い交差点の模様がどこかで 私ではない人が……………木澤 豊 14

## 連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評 <15> ……………富哲世 03  
 神戸詞あしび101「ネット放送局として生き残るか FMYY」……………大橋愛由等 16

編集部だより★32/20年間かかわってきたFMわいわいが3月末をもって地上波の放送がなくなり、すべての通常番組が中断に追い込まれた。もともと赤字体質だった同局なので、4月からさらにスリム化(スタッフや機材、番組制作費用の持ち出し)して再生を目指そうとしている。ただインターネット放送局になったとしても、課題は多い。たとえば、著作権の問題。課金対象の楽曲が大幅にふえてしまう。わたしがパーソナリティーをつとめる「雨の風」で流していた音楽は、奄美の民謡と奄美出身の歌手が歌う曲(ポップス)である。民謡が90%以上を占めており、それらは著作権フリーの範疇内である。民謡(シマウタ)とはひとびとが生活のなかから紡ぎだされたもので、いつどこで誰が作ったのかは、わからないし、作り手は個人であるより、集落(シマ)のひとたちである。こうした世界であるから著作権は成立しにくいのでネット放送局でも対応しやすい。——さて、FMわいわいは放送局として存続するのかどうかいま再構築の真っ最中である。固唾を呑んで見守っている。(大橋記)

◆ I miss 環句

岩脇リーベル豊美

鳥ら哮り猷刎ねまわる春夜明け  
 宙吊りの赤星高圧線下数センチ  
 朝食は冷蔵庫とスマホ車中に響きわたり  
 木蓮僧が舞い降りそうな黎明のかたち  
 ジーメンス社前庭の秋桜子句碑花開く  
 ではお先にと中座する勇氣なく花見酒  
 車窓から異性アピールの二兎巻き毛の記憶  
 吟遊と詩を書きはじめている目的地  
 菜のパノラマ死後出版の詩集編む

◆ 春水 三十句

高橋雅城

辻占を燃しては消えぬ春の川  
 曲線と消ゆる尾びれや春の川  
 あぎとふが二三消えゆく春驟雨  
 その影は尾びれならむや春の水  
 糸巻はころりと春の真中かな  
 井は厚みのありて五加木飯  
 その重みほどよきうこぎ飯茶碗

海市立つかい人二十一面相  
 庭のさき庭のさきへとしゃぼん玉  
 春の水たらひにすくひ恋もなし  
 驚かす雪代山女に驚きぬ  
 伝書鳩放ちて春は響みけり  
 オムライス崩して春の盛りかな  
 春立ちぬ宅配便が軽々と  
 疲れたるひと日窓には春埃  
 立春や鉛筆の芯そろいをり  
 揃ひたる色鉛筆や春浅し  
 風車まはる傍ら眠気さす  
 捕らえむと捕らへ難しや紙風船

指先を一寸余す紙風船  
 敷石を掃くレレレのレ春寒し  
 知恵の輪の解けそうな氣する春麗  
 湯けむりと桶のケロリン日は永し  
 春まだきそつと絆創膏剥がす  
 忘れたる歌詞そのままの日永かな  
 眼帯のガーゼを替へむ春日影  
 寿司飯の弁当待ちて佐保姫と  
 春の日の稲荷の寿司を一口に  
 春の日の干瓢巻を一口に  
 朧夜の意識朦朧コギタチオ

## ◆ 漂流

中嶋康雄

ドラム缶が転がっている  
ドラム缶の周りをプラスチックが  
カチャカチャ歩いている  
グループ分けが始まっている  
なかなかグループが決まらないようで  
もめているようだ  
ドラム缶が苛立ち紛れに蹴られている  
錆がポロポロ落ちている  
靴を脱ぎ裸になり  
ドラム缶の中に飛び込む奴がいる  
中から黒い煙が出る  
まだまだグループが決まらない  
退屈そうに下を向いている奴が

ドラム缶の錆を拾って食べている  
メモがでまわる  
すごく簡単なことが書いてあるが関係がない  
電車の音がする  
電車はドラム缶の底へ行く  
ドラム缶の底はお花畑で  
灼熱の蝶の目が光っている  
電車を下車すると  
蝶に襲われ粉々になる  
蝶は粉々を自分の羽に塗りたくり  
新しい鱗粉を自慢しあう  
蝶の目が巡回する  
ドラム缶が打ち鳴らされる  
グループ分けはまだ決まらない  
蝶が苛立つ  
津波になる  
なにもかもを飲み込む  
ドラム缶の暗闇で  
長い漂流が始まる

## ◆ 交差

中嶋康雄

やわらかいものが  
背中を這う  
やわらかいものと  
やわらかいものが  
交差する  
液を出す  
背中に液が流れる  
球が吸う  
球は周縁を廻遊する  
だんだん表面が張りをなくす  
窪んだところに  
雨水がたまり  
時間が経ち  
どす黒くなる  
どす黒いものと  
もつとどす黒いものが  
交差する日々  
息をするたび  
交差を繰り返し  
交差はあまりよくないことだと  
前に立つ先生が

いやな顔をするが  
交差の正体のことも  
交差の止め方も  
教えてくれない  
教えてくれるのは  
折れてしまった枯れ枝の  
長さの数値だけ  
そんなことはなんの役にも立たないとうそぶくと  
長さの数値の小数点以下のことを  
しつこくしつこくテストに出して  
うふふと笑う  
古い横断歩道が  
風に舞う  
先生が横断歩道に巻きつかれ  
退場してゆく  
出口はいつも薄暗いトンネルで  
口のない  
先生が  
はためいている  
壁に  
小数点以下の解答を  
書き続け  
砂糖水をときどき吸って  
うふふと笑う安心に  
一応は  
生徒をいざなう



## ◆ 観音

### 富哲世

水かげろう差す浮島の梢の先に  
初音の鶯の声が聞こえ  
それが日和のなか親しげにも厳しくも聞こえ始めて  
ここは石の褥に親子の眠る  
常春の庭か。  
しばし貧困の悪夢から解き放され  
広い葉叢が影を落とす川縁の並木通りを窓からぼ  
んやりながめていると  
身のおきどころのない心細さと  
ひとりはぐれてゆくつかの間の自由の安らぎが  
摘み残された実のように無い風にほどけてゆくの  
を感じる。  
痛みを好きになることができるだろうか。  
堪えがたい疼痛はひとごとのように何気ない日々  
のすき間に  
勾配のついた  
腐りゆく漿果のように熟れて甘く匂う  
薫くさい象舎の蒸れた薫りを貼りつけ  
その離れゆく過去が未踏のものかは定かならない  
ままに  
わたしがいつももないもののために  
今ここまでたどり着いていることを示してくれて  
いる。  
どんな診断装置も治療機械もそれを言い当てるこ  
とはできないで美しい曲解の位置に

## ◆ 「扉」の絵を描く試み

### 有時 秀記

絵筆を持って、画家が描こうとするのは一枚の扉で  
ある。はじめは水彩絵の具で描こうと、いくつかの  
色の絵の具をパレットに溶いた。カンバスに薄茶色  
が塗られ、長方形の薄茶色の平面ができてくる。扉  
の取っ手は濃い黄金色に描かれ、平面からは浮き出  
してみている。扉の周囲は青空を想わせる薄い青  
色に塗られている。青空を背景にした一枚の扉絵  
は、まるで、取っ手をつかめば、そのまま扉を開け  
てその向こうの建物の中に入れそうな完成度であ  
る。

しかし、一枚の扉の絵が完成したと思うやいなや、  
画家はその扉の右上から、左下に向けて、鋭いナイ  
フで切り裂いていった。扉の左下まで裂け目が入る  
と、じわじわとその裂け目から水分が浸み出してく  
る。画家は筆先でその水分を吸い取り、代わりに油  
絵の具で赤色を裂け目に塗りこめる。周囲の薄い青  
色の表面にも赤い色を塗って完成する。赤味がかつ  
た青空を背にした扉。斜めに血のような赤く細い  
川。取っ手は手のひらを嵌め込んだるよう描き  
加えた。画家は、それを眺めながら、絵の題名を小  
さく、カンバスの枠の下に書く。ためらいながら、  
「失われた扉」と書いたのち、すぐに「開かない扉  
」と書き直す。

テルミンの透明な悪事を断続的に操りながら  
小間切れの探査の果てに撫でるように  
緩いメロディの物まねを再演するだけだ。  
花咲く前の公園から  
水から上がった一本の道が庭を通り森を抜けてぞ  
ろぞろと這い進んでいる。

べんべん草の生えた灰色の まだらの砂利の縁飾  
りの内に  
不規則に突起の並んだ幾筋もの茶褐色の畝を伸ば  
して  
からのキャリーが子連れ狼のごと ごとごととな  
んぎだ。

松林を過ぎ  
静かなまばらな家並も過ぎて  
ただ一本の道だけになっっている。  
眩しいハートの空の近くを  
千切られたようなカラスのかたちもひらひらよぎ  
って

わたしはしらないワニの背中の上を歩いている。  
渚の煌めきも見えずタツノオトシゴや  
たくさんのいびつな羊の卵を孕む世界の四大のた  
だ真つ直ぐに歩くしかない輪郭も岸も分からぬ  
ごわごわの地の表皮。  
越境する低いノイズの氾濫に包まれ  
塩にまみれ日光と潮風に苛まれて呻いているとき  
首から先の落とされたのたうつこのワニの  
やがて顔のない夕日が沈むのだから  
頭のあるはずあたりにある一軒の家の窓奥の鬚り  
のなかから能面の顔を覗かせ榊の手を振りながら  
オオナムヂが歌っていた

夜が更けて、眠りに就いてのち、画家に夢魔が訪れ  
る。歪んだ扉が蝶番からはずれて、そのまま空を飛  
び、いずこかへ飛び去るのだが、そののち、耳型の  
顔が飛び去った扉と入れ替わりにこちらに向かっ  
てくる。その顔には目が付いていないが、耳型ゆえ  
に、真ん中に空洞があり、音声を聴き取ることがで  
きるかのようだ。夢魔の声音がその耳から湧いてく  
るように、水分が耳から浸み出してくる。いやむし  
ろこの水分が夢魔の属性そのものである。湧き出し  
た水分は、はじめ半透明だったが、やがて徐々に赤  
みを増して、とうとう真つ赤な色に変化した。まる  
で、血の色である。耳型の顔の真ん中から湧いてく  
る血の色の流れは、そのうち川のように滔々とした  
流れとなる。夢の中で、画家はその多量の血の流れ  
に溺れそうな感覚を覚える。耳の働きは聴くことな  
のに、なぜ溺れそうになるのかと、画家は夢幻のう  
ちにぼんやりと想うのである。そしてとうとう真つ  
赤な色の流れは大海に注ぎ込み、赤い海になる。血  
の海の中で呼吸することもかなわない。画家はあわ  
やこの夢魔によって溺死せんばかりとなる。溺れそ  
うな感覚から脱け出そうと、もがいたすえに眠りか  
ら覚めたのである。汗と動悸が覚醒に付随してい  
た。

眠りから覚めたのち、「開かない扉」と題した扉の絵  
は、完成したはずなのに、様相を変えて、扉は耳状  
のかたちで、真ん中には空洞が描かれていた。その  
扉の取っ手はまさに手のひらの形状の肌色であり、  
画家の手のひらと合わせ鏡のようになっていた。耳  
型の扉の右半分は青色で、左半分は黄色である。中  
央の空洞はその境にあり、白色に近い半透明であ  
る。扉の周囲は真つ黒に塗りこめられている。画家  
が外枠の下に書いていた題名は、と見ると、それも  
また、「呼び声を聴く」と書き直されている。

マデリン マデリン  
あかほだかの神よ  
お前のタマはどこにあるの  
真清水でからだを洗い  
ガマの穂を敷き詰めて花粉まぶしに  
なるがよろし。

なぜか生まれなかつた気がする  
どこまでも遠い空虚の先の明ららの出逢い  
なにをそんなに生き急ぐのか  
花の咲く頃の公園に  
ピクニックに出かけたことがあった。  
ひかりの穂先にかがられ  
空を隠した、流れの鞍に枕のように抱きついて  
眠りのなかを呼ぶ声があった。

花の咲く公園に  
ピクニックにでかけた。  
と言ってみる。  
許しなく追い越してゆくものらの姿を目で追いな  
がら  
もう、苦しみから解き放されたのだから  
と首いた頭のなかで言ってみる。  
どうかたくさんの悲しみを  
悲しまないでください。  
夜半 居間の飾り棚の付近で  
真珠が密かに泣いている。  
けたの前の鳥居の脇の造成地で  
鏡を持たない母も娘も呪いを受けて手をつなぎ  
うるこに覆われもろい石の柱となつて  
立ち尽くしているのだった。

眠りから覚めた画家は、瞬時のうちに、この絵の変  
化を見てとり、夢魔が描いたと覚しい扉を興味しん  
しんと眺めたのち、合わせ鏡になる取っ手に手を合  
わせ、少しばかり押ししてみる。するとやにわに耳状  
の扉は平面から逸脱して、画面の向こう側へ開いた  
のである。それとともに、向こう側へ引きこまれそ  
うになりながら、なにやら呼び声を聴いた気がし  
て、耳を澄ませる。平面から立体に変わる瞬間が画  
家には確かな感覚として残っているので、さらに扉  
の取っ手を回すように押ししてみる。呼び声は「おま  
えだけは入って良い」と山びこのように反響して、  
風が向こう側へ、扉を吸いこむようにして開いたの  
である。そのとき画家が開いた扉の向こう側に目に  
したのは、両側に赤黄色い炎の柱が立ち、その両の  
柱に挟まれた真つ青な空間である。「おまえだけは  
入って良い」という呼び声は、さらに反響して、画  
家を吸い込み、向こう側へ連れ去った。あとには画  
家の絵筆とパレットが残され、そのそばに未完の自  
画像が落ちていた。その自画像は右半分が銀色の仮  
面のような色彩で描かれ、左半分が血色の良くない  
赤黒い色で描かれていた。顔全体は楕円形の真ん中  
あたりが左右からひしゃげたように、くびれた形  
で、鼻はまだなく、目もまだ、描かれずに空洞のま  
まであったが、それは彼方を見ているような錯覚を  
引き起こしそうな空洞である。

扉のカンバスは雲散霧消したが、その跡には碑文が  
残された。「画道を探究した者、この場で呼び声を聴  
き、みずから身をもつて極めて稀なる道を開けり」

## ◆夏の日に

黒田ナオ

氷山が流れてくる  
見たこともない  
行ったこともない  
アラスカの氷河を  
ぶつかり合いながら流れてくる

電気屋さんの店先から  
どっぷり浮かんで流れてくるのは  
大型冷凍冷蔵庫  
ときどきガシャーンと音がして  
透明な四角い氷が出来上がる

動物園のベンチで  
首にタオルを巻いたお父さんが

子供とおにぎりを食べている  
ペンギンたちはぬるいプールに潜るたび  
まだ生まれてから一度も行ったことのない  
故郷の海を感じている

氷山はゆつくりと  
青い海を旅している  
鼻歌を歌いながら  
ときどき空を見上げては  
はるか昔 湧き上がる白い雲だったことを  
ほんのり思い出している

冷蔵庫のドアを開けたとたん  
私はほんの一瞬  
遠い昔 北京原人だったことを思い出した  
マンモスの固い骨付き肉にかぶりついて  
うまい と感動している  
その疼くような胸の高鳴りに  
そつと手を当てる

## ◆だらけ

大橋愛由等

扉はしめたままにしておこう  
(そのむこうにあなたの春の闇がしずかに待ち構えて  
ることをあなたにしらせたくないから)

対話、なんて、してこなかったよね  
(窓のそとは鳥の失念にみたされていることを青林  
檜たちに伝えていないことをすつかり忘れていた  
土がしよっぱい  
(まざるとなれてくるって啓蟄の日の朝もぼくはあ  
なたに耳うちしたけどゆずり葉が13の倍数になっ  
ていたのに気づいて)

眼鏡はハデスにおいてきた  
(あなたはいつもすべてを視ようとしてきたから蓄  
薇も黄交趾色でなくてはいけけないことは知っていた  
けど)

五月はかなしみだらけ  
(こんわくしている風たちを透過することばの種類が  
すくない日にならずあられわれるパトスはなになの  
かしているつもり)

倉庫は靴べらでいっぱい  
(名づけられることを拒んできたのはまちがいだつた  
とチラシ広告の裏面にかきしるそうとしたのにな  
たは「それもちがう」)

銀色スカートを見てまばたきする  
(風と反対方向にからころ小石が疾駆していくすがた  
を無表情にながめていたぼくはそつと泣く場所をさ  
がしていた)

その隙間が哲理をうみだす  
(山道には「嗚呼」とためいきを発声する常葉樹があ  
りあなたはいじわるそうな目つきをむけ「ウソつ  
き」と言う)

床がつめたい  
(生きていてこういうことなんだと言いたい夜に  
はかならずあなたは背をむけ寝息をたて鉱山の夢の  
なかにたゆたっている)

鍵はいくつあっても  
(なまつばをのみこんで公園の傍をとおるいつものク  
セで山並みをみつめてふと朝餉でたべたのは春の闇  
だったことを思いだす)

◆ ティー

月村香

手ですくうようにティーをすくえばそれはこぼれてもつ  
たいないかどうかがグレイプフルーツはドキドキしている  
たまに書くのか散文詩を疲れた顔をするなするな呪われ  
たように小さいノートにも書くんだねそれでうまくまと  
まるんだねなぜなら君は微笑んでいるからわたしの心づ  
くしのカップケーキを我が家の灯の下で邪魔になるほど  
詰め込んだ菓のケースをもの見事に忘れそうやっぱり  
疲れた影を忘れられずにいるんだねさつきからこうやっ  
ていたかったこうやっていたかったねなぜならそれは君  
の夢今から燃えられるか今からこだまをなげあおうか紙  
の上でつぶしたダニの跡はティーのこぼれた一滴のようだ

◆ 奴婢論（額に手をおく）II

高谷和幸

四月の空 たれこめる（つがれたうつわ  
であるかのように） 隠れたものが見えな  
い空に 数をかぞえてみて 抜け落ちてい  
るものに気付く 亡くなった貌には数式が  
あった。より近い数字「固有のベクトルを生  
きた」にさし替える橋 万筋 千筋 子持  
縞 の平行線を引く行為は数をかぞえる行  
為に似ている いや誰かに似てくる。

※頭一肉とは、動物への「動物になるこ  
と」の変数にすぎなかった。

痕跡記憶（それを噴霧器に譬えたことがあ  
る）は すでに マンションとマンション  
の間の壁にもあるはずだった 朝早くから  
つばめの啼く声が壁から聞こえる 四月  
《わたし》 どこにもない湖に浮かぶ 名前  
のない鳥の無音を聞くひと 《おりたたまれ  
たII額に手をおくわたしたち》がいる 再  
帰性のない数式をショートカットしてしま  
った 彼は「もうつなぐことも出来ない。」

◆都市草紙6

黄色い交差点の模様が

木澤豊

わたしのなかのわたしの残響が残ったままの雑踏で あの花の名前は何だったか 思い出せなかった その残響がじぶんだとは気づかないまま 交差点の黄色い線を踏んで向こう側へ渡る  
たくさんの夢を持ったまま うん 持ち重りがするほど歳をくつたなあとつぶやき ちよつと腰を伸ばす格好をとると ビルとビルに挟まれた黒い倉壁の家が傾いた

昨夜 夢をみた 天王寺駅のホームにいと電車が入ってきた開いたドアを入ると終着駅だった そこは改札なしの廃駅で町は安普請の店が並んで 何か古い西洋の曲が聞こえる  
汚れた作業服の青年が三人 黒い服の若い女が一人 おだやかな口調でしゃべっていた  
四人が店に売っている奇妙な魚や玩具をひとつずつ親切に説明した それから宿に案内してくれたのだった それはずでに屋根は破れて一切れの青空が見えた 駅はどこだったのだろうと訊くと「すぐですよ」と一緒に来てくれたが 駅はなくなっている 背に波音がするだけだ

どうしてここで 夢なんかおもいだしたのか わからないことはわからないままにして置くと夢はあたらしくなり あの交差点に帰れない 黄色い線も踏めない でも わたしはじぶんが実在するとおもっただけで事足りている いまこは いちど過ぎれば戻らない  
あの砂っぽい道を歩いたのは だれだったのだろう よし 踏んでいこう

電車に乗っても 眠ってじぶんを脱ぎ捨てて 得体の知れないわたしが点滅したままに  
この交差点で覚え書きすると 夕方になつて 倉壁の小さい窓に花が開くように 電灯がついた窓のむこうに あの海辺の町があるはずだった  
ヌードルの白いカップが からからと倉壁の薄暗い路地を転がって消えた

夢とここにいること どうしてわけられるのか わけるのか いま熊本という大地が揺れ続けていて、それはわたしの実在が揺れていることになりはしないか 交差点のラインは曲がっていないのか 不確かさの向こうに見えた一切れの青空さえ 落ちてくるかもしれない ここに来たのだから駅は在った と言えるか

◆どこかで 私ではない人が

木澤豊

ある日 わたしは きつねのように孤独ではないか と気づいた  
里に出た狐のように くたばつてもいいんじゃないかと  
ときには 指を折って いちにちを数えていた  
ぬれた毛皮から 獣のおいが立っていた

取り戻したような 取り逃がしたような 場所がある  
崩れた家から 花のおいがしていた

匂い立つトマトの葉っぱの  
トマトというかたちのなかに  
ほんとうのトマトが住んでいるというのが  
なんだか おかしい

狭い畑があつて  
土壁の倉庫のむこうに  
たくさんの星が つぶやいていたなあ

地面の凹凸が山脈に見える日だ  
どこかで 私とはちがう人が  
ひとりで 同じことを考えている



# うた 神戸詞あしび

101-2016.04.24 大橋愛由等



FMわいわい「南の風」地上波最後の放送。パ  
ーソナリティの大橋(左)とゲストの清眞人氏

FMわいわい「南の風」地上波最後の放送。パーソナリティの大橋(左)とゲストの清眞人氏

神戸市長田区にあるコミュニティラジオ局のFMわいわいが、三月末をもって地上波の放送を終了した。これにより、わたしが一九九六年から二〇年間続けてきた「南の風」奄美篇の番組は、四〇七回で中断することになる。中断と書いたのは、四月以降、地上波での放送はなくなつたものの、現在もインターネットラジオ局として存続しつづけようと模索している試験期間中であり、今後、FMわいわいがネット放送局として生き残るかどうかが新しいスタッフを中心に再構築している最中なのである。

地上波の放送終了にいたつたのは、総務省が、すべてのコミュニティラジオ局に対して、災害時における情報発信メディアとして機能するよう設備やスタッフ態勢の充実を迫つたことから、FMわいわい側との齟齬が深まった。全国のコミュニティラジオ局のうち、自治体の第三セクターとして発足・運営しているところは、総務省の要求する態勢強化に応じる財政的基盤は整っているが、FMわいわいのような民間資金で運営しているNPO法人では、さらなる設備拡充に必要な資金調達や災害時における放送スタッフの確保などは困難であり、大きな障害となつた。こうした総務省の方針転換は、東北大地震ののちに生まれ、各県の被災地コミュニティラジオ局

## ネット放送局として 生き残るかFMYY

が、震災から五年を経過して存続できずに廃局にいたる要素のひとつとなっている。

こうした総務省の方針転換は、背後に安倍政権の放送メディアに対する政治意図が潜んでいると考えられなくもない。災害時における設備・態勢強化という建前を前面に出すことで、財政基盤の弱い民間資金によるコミュニティラジオ局は淘汰されても仕方なしという現実を招いていることでも、この方針転換は一定の成果を得ていることになる。

一方のFMわいわいは、地上波の免許を総務省に返上するにあたって、この局が生まれる原初的意味を確認する機会となつた。つまり同局は、一九九五年の阪神・淡路大震災が発生した時に、外国人被災者にむけて情報発信した韓国語放送とベトナム語放送が合体して生まれた多言語放送局なのである。つまり伝達のための手段がラジオであつて、ラジオ局を作ろうと考へていたわけではないということである。

そうした出発時の事情からそのコミュニティラジオ局の運営は会社組織でないと免許が更新されないとされ、その組織には外国人が入つていては免許がおりず、FMわいわいを構成してきた在日韓国・朝鮮人の理事職を排除して免許更新にいたるという苦渋の選択をした時期もあつた。また機械の故障で放送が中断したことをキッカケに、あらたな発信設備のために資金調達のための募金を募つたこともある(この時は多くの寄付金が寄せられた)。

そうした何度かの危機を乗り越つてきたFMわいわいであるが、広告収入が期待できない運営資金不足の慢性化は避けがたく、日曜日の放送停止などでのり切ろうと努力してきた。しかし、これからFMわいわいが存続するのか誰も分らない。ネット放送局になれば、課金対象となる楽曲が大幅に増えることなど、多くの課題が待ち受けている。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.112

神戸

2016年04月24日 通巻112号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価600円(税込)